趣旨説明: 背景

- 第5期科学技術基本計画･･･オープンサイエンスの推進

③　オープンサイエンスの推進

オープンサイエンスとは、オープンアクセスと研究データのオープン化（オープンデータ）を含む概念である。オープンアクセスが進むことにより、学界、産業界、市民等あらゆるユーザーが研究成果を広く利用可能となり、その結果、研究者の所属機関、専門分野、国境を越えた新たな協働による知の創出を加速し、新たな価値を生み出していくことが可能となる。また、オープンデータが進むことで、社会に対する研究プロセスの透明化や研究成果の幅広い活用が図られ、また、こうした協働に市民の参画や国際交流を促す効果も見込まれる。さらに、研究の基礎データを市民が提供する、観察者として研究プロジェクトに参画するなどの新たな研究方策としても関心が高まりつつあり、市民参画型のサイエンス（シチズンサイエンス）が拡大する兆しにある。近年、こうしたオープンサイエンスの概念が世界的に急速な広がりを見せており、オープンイノベーションの重要な基盤としても注目されている。

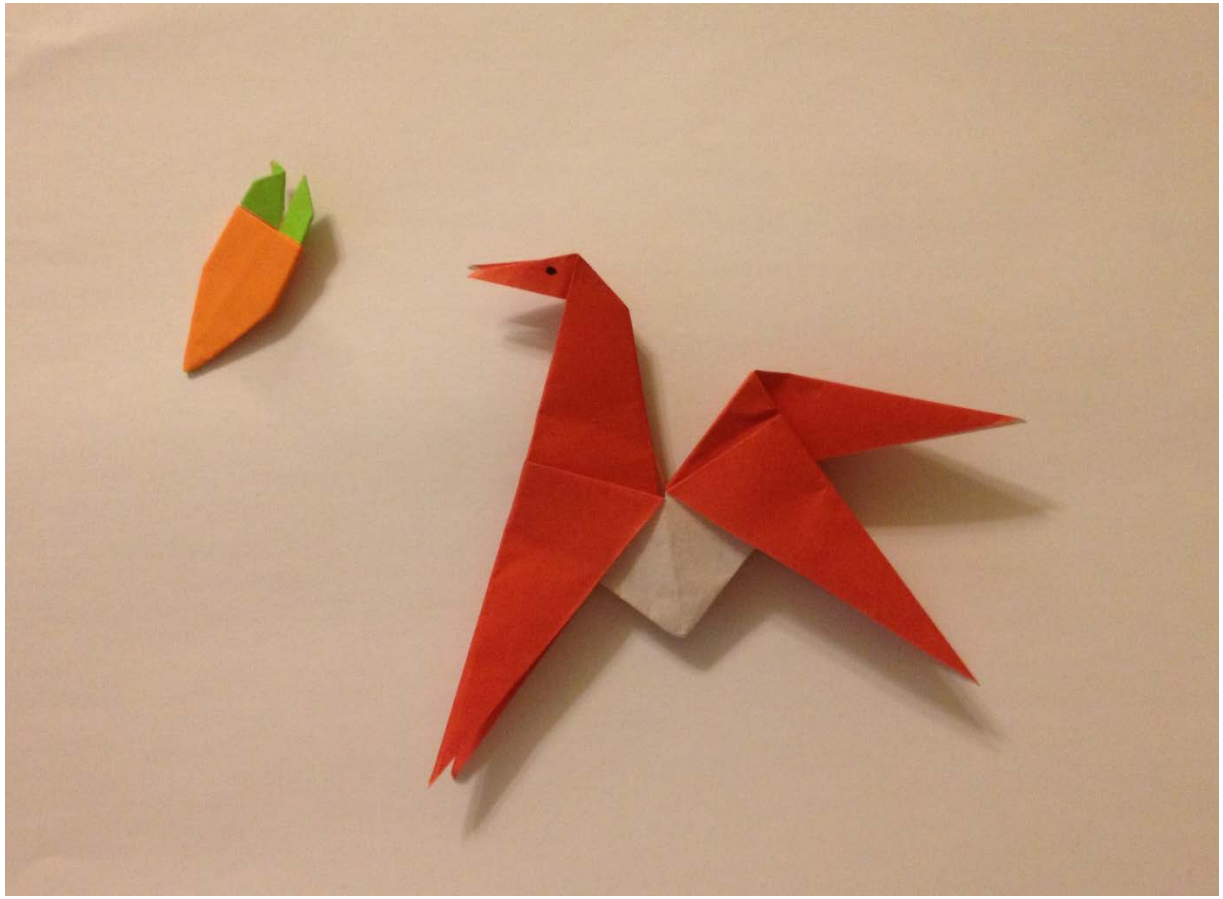
こうした潮流を踏まえ、国は、資金配分機関、大学等の研究機関、研究者等の関係者と連携し、オープンサイエンスの推進体制を構築する。公的資金による研究成果については、その利活用を可能な限り拡大することを、我が国のオープンサイエンス推進の基本姿勢とする。その他の研究成果としての研究二次データについても、分野により研究データの保存と共有方法が異なることを念頭に置いた上で可能な範囲で公開する。

ただし、研究成果のうち、国家安全保障等に係るデータ、商業目的で収集されたデータなどは公開適用対象外とする。また、データへのアクセスやデータの利用には、個人のプライバシー保護、財産的価値のある成果物の保護の観点から制限事項を設ける。なお、研究分野によって研究データの保存と共有の方法に違いがあることを認識するとともに、国益等を意識したオープン・アンド・クローズ戦略及び知的財産の実施等に留意することが重要である。

また、国は、科学研究活動の効率化と生産性の向上を目指し、オープンサイエンスの推進のルールに基づき、適切な国際連携により、研究成果・データを共有するプラットフォームを構築する。

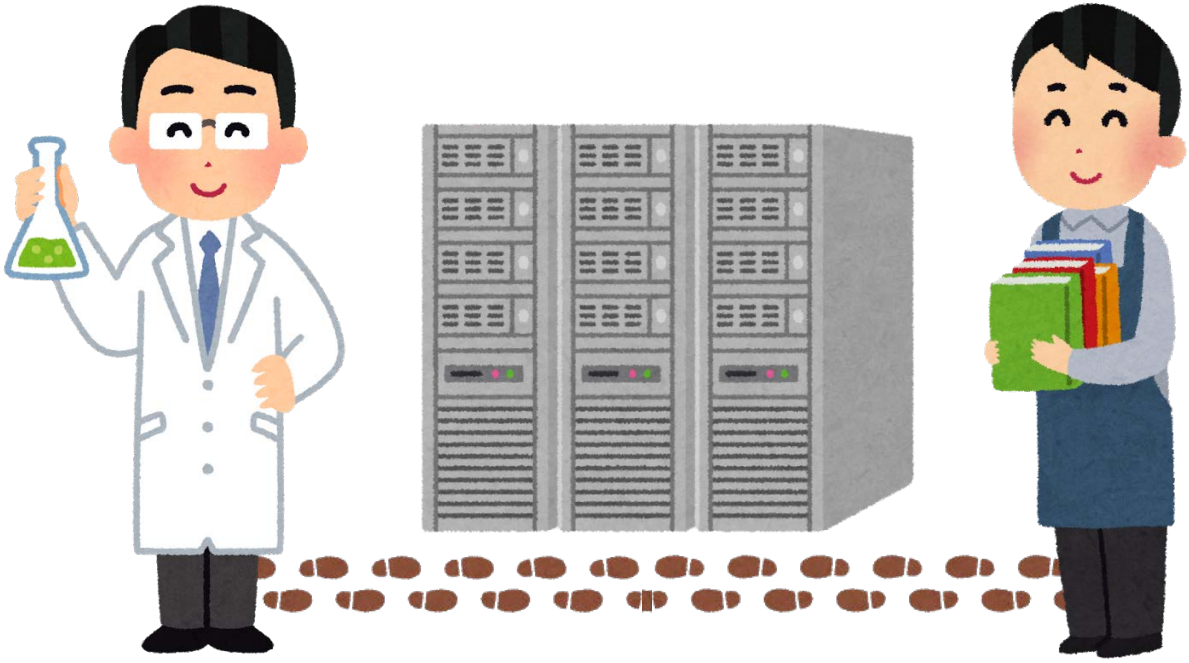
趣旨説明: インセンティブ

- 研究者・研究機関へのインセンティブ
  - 大局的・・・新たな知見や価値が生み出せる。科学技術の進展に貢献できる。
  - 局所的・・・成果に見合った処遇・研究費が得られる。



趣旨説明: データマネジメント

- データを公開するための具体的な方法については、研究者が独自・個別に行うよりも、書誌リポジトリなどで一定の経験を持つ専門家集団(=図書館・機関リポジトリ構成員)のサポートを得て、ルーチン化したほうが良い結果が期待できる。
  - 研究者にとっての一種のインセンティブとも考えられる。
- 研究者と図書館・機関データリポジトリ構成員との対話・協同が必要。



素材提供: いらすとや(http://www.irasutoya.com/)

趣旨説明: セミナーのねらい

- 本セミナーでは、
  - 医学生物学分野におけるオープン化へのインセンティブ
  - 古写真コレクションのオープン化における図書館の役割
  - 超高層物理学分野で実際に行われている図書館と研究グループの連携
  - 日本の大学における研究データマネジメントの今後の展開
  - 研究データ利活用に関する国内活動及び国際動向

  などの話題提供を通して、日本における研究データのオープン化を「**図書館員・研究者の協同**」という観点から今後どのように推進していくことができるかを考えてみたい。